

三加和町文化財調査報告 第10集

田中城跡

X

— 伝・弾正屋敷跡調査の概要 —

1 9 9 6

熊本県玉名郡
三加和町教育委員会

三加和町文化財調査報告 第10集

田中城跡

X

— 伝・弾正屋敷跡調査の概要 —

1 9 9 6

熊本県玉名郡
三加和町教育委員会

序

教育委員会では、国庫補助事業を受け「日本一づくり運動」の一環として昭和61年度より田中城跡の発掘調査を進めてきました。平成7年度で10年の節目を迎えましたが、平成元年12月に山口県立文書館で発見された『迎春・和仁仕寄陣取図』により、一躍注目を集める所となりました。この貴重な歴史的遺産を積極的に調査・保存することは、郷土の歴史や学術的研究を深める上で大変貴重なことであるとともに、三加和町の大きな財産でもあります。昭和61・62年度に主郭、昭和63年度に主郭東側の曲輪、平成元年度に空堀、平成2年度に西捨て曲輪、平成3～6年度に城の西側に広がる平場の調査を終え、青磁・白磁・染付・鉄砲玉などの遺物が出土し、V字形をした空堀（薬研堀）・連棟式建物跡・石瓮・石切り場などの遺構が確認されました。

今年度は、「弾正屋敷跡」と言い伝えられている箇所調査を行い、掘立柱建物跡のほか井戸跡なども確認されました。これらの遺構・遺物を歴史的・学術的に確認・検証するために、発掘調査10周年を記念して、平成8年3月10日に『検証・田中城跡』シンポジウムを開催しました。講師に田中城跡専門調査委員の東京大学名誉教授石井進先生、鶴見大学教授大三輪龍彦先生、玉名市立博物館館長田邊哲夫先生、熊本大学教授北野隆先生、県文化課整備係長大田幸博先生を招き、今もなおベールに包まれた謎の部分と発掘調査の結果に基づく考察をお願いしましたところ、従来の調査よりもさらに一步進んだ「布掘り」と呼ばれる柵列等が出現しており、難攻不落の要塞としての輪郭が新たに確認されたこととなります。

今後、ますますその重要性が高まり、本町としても検証されたこれらの遺構を大切にしながら、まだ解き明かされない「田中城跡全体像解明」に向けて調査を進めてまいりますので、関係諸庁・機関のご指導とご協力をお願いできれば幸いに存じます。

平成8年3月

三加和町教育長 今村 憲 夫

例 言

1. 本書は熊本県玉名郡三加和町が「田中城総合整備計画」の一環として、平成7年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、国庫・県費補助事業として三加和町教育委員会が実施し、黒田裕司がその任にあたった。
3. 遺物及び遺構の実測・製図・写真撮影・拓本は黒田が行った。
4. 調査の方法・遺物に関しては、専門調査委員のご教示を得た。
5. 本書で使用した略記号は次のとおりである。
S B－掘立柱建物跡, S D－溝
P－柱穴
6. 出土遺物は、三加和町教育委員会で保管している。
7. 本書の執筆・編集は黒田が担当した。

本文目次

第1章 序 説	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査組織	1
第3節 調査経過	2
第2章 調査の成果	7
第1節 調査の概要	7
第2節 遺構と遺物	8
(1)遺 構	8
①掘立柱建物跡	9
②溝	9
③井戸跡	10
④柱 列	10
(2)遺 物	10
第3章 まとめ	14
報告書抄録	21

挿 図 目 次

第1図 全体図	4
第2図 遺構配置図	5
第3図 掘立柱建物跡実測図	8
第4図 II区遺構配置図	11
第5図 出土遺物実測図（1）	12
第6図 出土遺物実測図（2）	13

写真図版目次

- 図版 1 (1) 調査前状況（遠景・北より） (2) I 区調査前状況（近景・北東より）
(3) II 区調査前状況（近景・南東より）
- 図版 2 (1) I 区遺構確認状況（北より） (2) I 区遺構発掘状況（北より）
(3) 掘立柱建物跡（東より）
- 図版 3 (1) II 区遺構確認状況（北東より） (2) II 区遺構発掘状況（北東より）
(3) 1 号溝（S D-01）発掘状況 (4) 井戸跡の石積み確認状況（北東より）
- 図版 4 (1) 火舎出土状況（1） (2) 青磁出土状況（6）
(3) 青磁出土状況（7） (4) 土師器出土状況

第I章 序 説

第1節 調査に至る経過

昭和61年に主郭の調査を行ってから、今年で10年目を迎えた。これまでに主郭のほかに主郭周囲の曲輪・空堀・西捨て曲輪、さらには『辺春・和仁仕寄陣取図』の発見により西斜面に形成されている平場というように調査を進めてきた。その結果、主郭では14棟の掘立柱建物跡や土塋など、主郭の周囲では焼土がびっしりと詰まり小鍛冶を思わせる土塋など、空堀は現地表面から約6m掘り下げてやっと堀底に達する大規模土木工事であったことなどが確認され、西捨て曲輪は当初監視台跡といわれていたが、柵列と堀が作られているだけで捨て曲輪と判断した。さらに、平成3年度からの調査では連棟式の兵舎と思われる柱列、石龕、石切り場などいろいろな遺構も確認された。

このような経過を経て、今年度は調査10年目ということでもあり、同じ西側斜面にあり
地元で以前から「弾正屋敷跡」と言い伝えられてきた箇所を調査を行うこととした。

第 2 節 調查組織

調 査 主 体 三加和町教育委員会

調査責任者 坂梨五十鈴（三加和町教育長：平成7年9月まで）
今村 憲夫（　　　　：平成7年10月から）

調査事務 小山 暁（社会教育課課長）
荒木 和富（社会教育主事）

調 査 員 黒田 裕司 (社会教育課主事)

専門調査員 岡田 茂弘（国立歴史民俗博物館教授）

大三輪龍彦（鶴見大学文学部教授）

田邊 哲夫（玉名市立歴史博物館館長）

北野 隆（熊本大学工学部教授）

阿蘇品保夫（八代市立博物館館長）

大田 幸博（熊本県文化課文化財整備係長）

発掘作業員 靄 浅代・靄 邦代・靄 サカエ・福原 スミ子・福原 房子・
高木ツヤ子

発掘協力者 石井 進（東京大学名誉教授・国立歴史民俗博物館館長）・工藤 敬一
（熊本大学文学部長）・中村幸史郎（山鹿市立博物館副館長）・坂本 重義
（南関町教育委員会）・五嶋 竜山（鹿山焼竜山窯）

第3節 調査経過

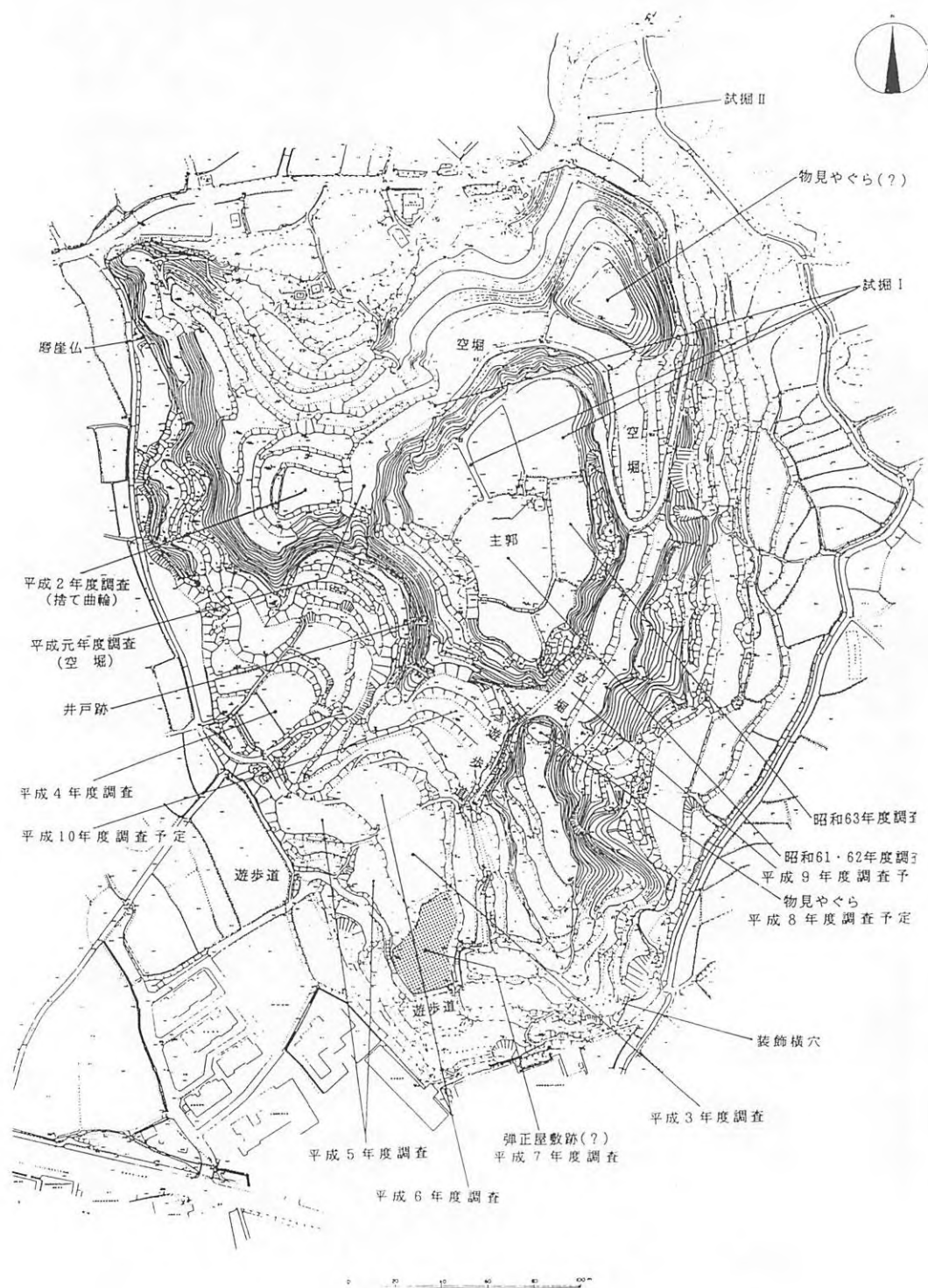
- 5月10日 泗水町教育委員会見学。(19名)
- 12日 植木町平木老人会見学。(20名)
- 31日 泗水町教育委員会見学。(31名)
- 6月1日 山鹿市下吉田老人会見学。(20名)
- 28日 石川県美川町教育委員見学。(6名)
- 8月1日 発掘調査開始。
調査区を中央から区切って北側をⅠ区、南側をⅡ区とし、まずⅠ区を調査し、Ⅱ区を排土場とする。
- 3日 長崎県長与町地域公民館連絡協議会見学。(49名)
- 24日 ふるさと学習「草雲塾・固庵塾」生見学。(8名)
- 9月4日 永田征夫山鹿市文化課長・中村幸四郎山鹿市立博物館副館長視察。
- 5日 ようやく柱穴らしい遺構が確認されだした。
- 25日 遺構の最終確認をし、写真撮影の準備を行う。小さな溝状の遺構が数本南北に走っており、柱穴はあまり確認できない。
- 26日 中央部で確認できた柱穴の並び具合を検討してみて、 $9.52 \times 4.17\text{m}$ の掘立柱建物跡を確認。南西隅の不明遺構から掘り始める。
- 29日 南西隅の不明遺構は途中から溝(SD-01)になっており、南東方向に延びていることが判った。
- 10月3日 実測用の杭打ちを行い、遣り方を組んで遺構実測にかかる。
- 4日 コスモス学級生見学。(67名)
- 11日 中央部を南北方向に走る、やや大きめの溝を掘っているが、平面で確認できた以上に延びている様子。先の方は、平面での確認が難しく底面からの確認となる。
- 17日 Ⅰ区の完掘写真撮影。図面を取り終えている部分から埋め戻しにかかる。
- 20日 Ⅰ区の埋め戻しと並行して、Ⅱ区の表土剥ぎを始める。
- 12月12日 Ⅱ区より過去10年で確認したことのない、大きな柱穴が確認されだした。今のところ 2×2 柱間の総柱建物跡を想定しているが、まだ延びる可能性もあり、精査の必要があるようだ。
- 13日 五嶋竜山氏、山鹿市立博物館陶芸教室生見学。(3名)
- 14日 遺構確認写真撮影。遺構の発掘にかかる。
- 18日 新しい溝を掘り終える。残りは僅かで、すぐ堀底が確認されたため、地山

が確認されていなかった西半分を掘り下げることにする。

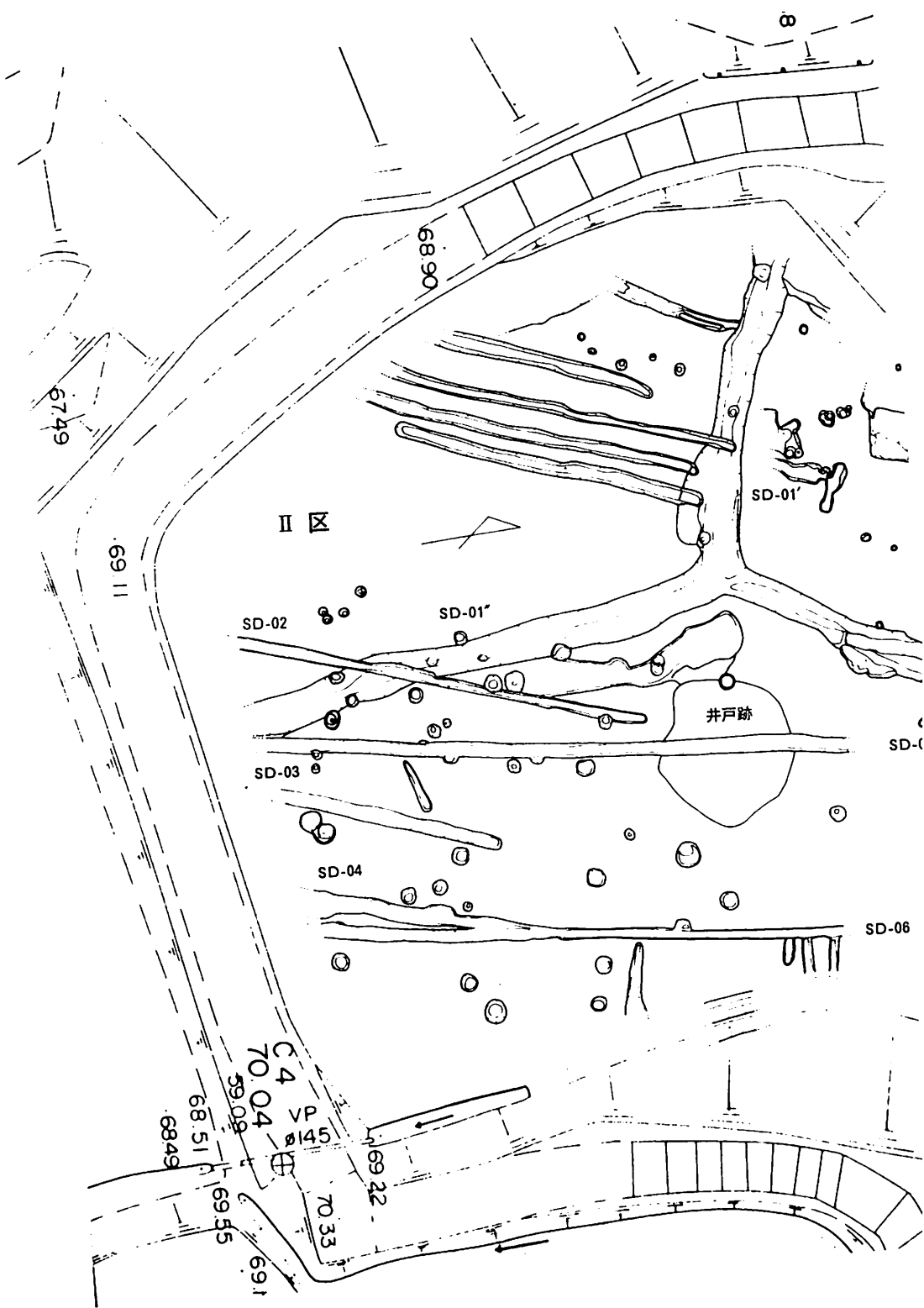
- 22日 大まかに掘り下げを終了したが、Ⅰ区で確認したSD-01の続きと思われる溝が、途中で西方向（SD-01'）と南方向（SD-01''）に分かれていることが判明。また、いくつか柱穴も確認されたが、東側で確認されたもののとの関連は今のところ不明である。

平成8年

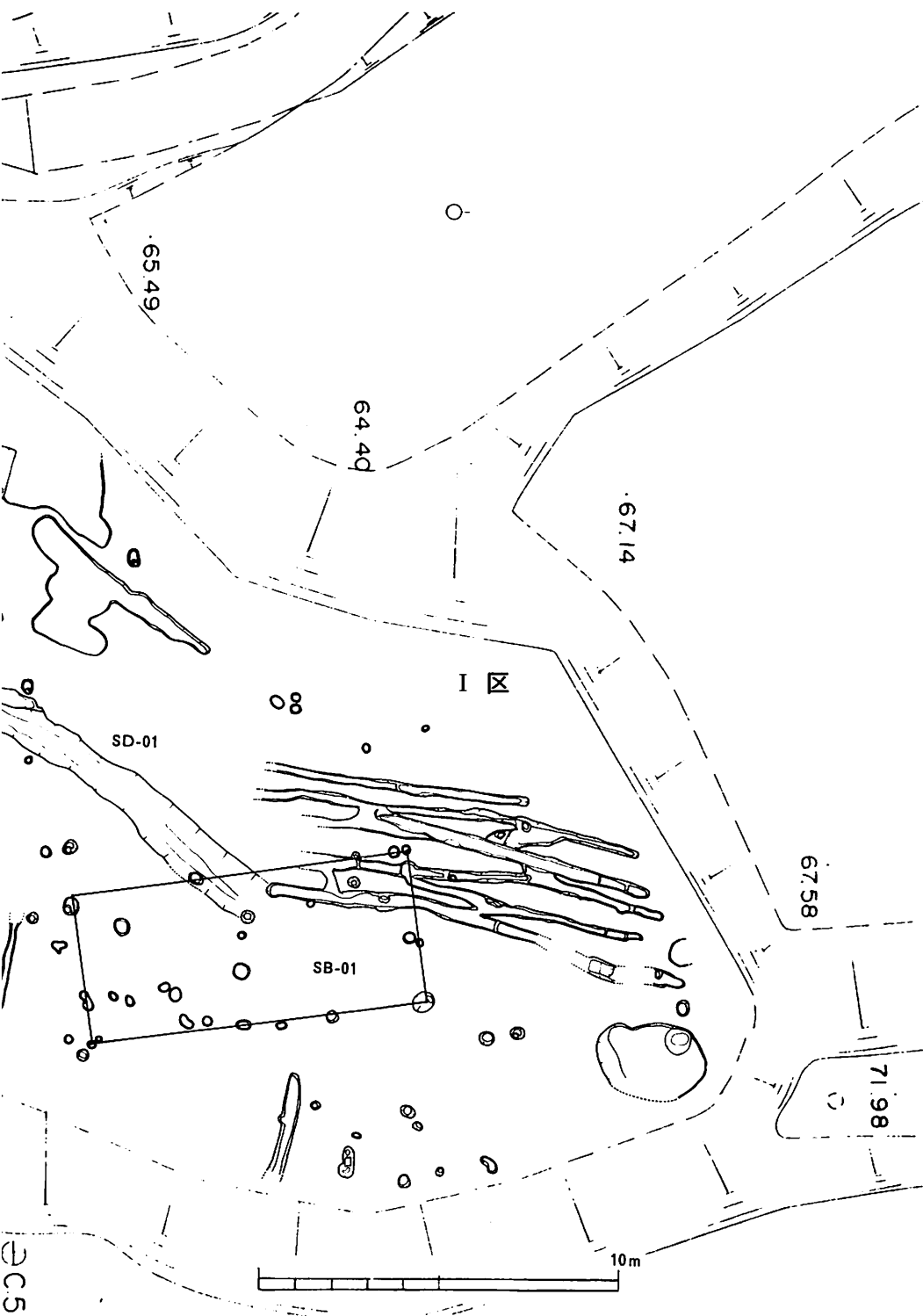
- 1月8日 調査開始予定だったが、風雨のち風雪が激しく明日からに延期。前途多難を思わせる。
- 9日 遺構の発掘を溝から始める。
大型建物跡の延び具合を精査したところ、北東隅の柱穴は確認出来なかったが、1×2柱間の下屋的なものが付く建物跡になるのではなかろうかと思われるようになってきた。
- 17日 時期が新しいと思われる溝を掘り終え、写真撮影の準備を行う。
- 25日 不明遺構を掘り始めたが、石積みを確認。井戸跡の可能性がある。
- 27日 市村高男中央学院大学助教授視察。
石積み遺構は、井戸跡と考えて良さそう。
- 2月1日 北野 隆熊本大学工学部教授・町文化財保護委員（3名）視察。
大型建物跡については、柱穴の組合せをもう少しじっくりと考えたが良さそうとの意見。図面取りを急ぐ必要があるようだ。
柱穴を掘り始める。
- 7日 発掘作業を終え、完掘写真撮影。
- 8日 泗水町シルバーヘルパー見学。（48名）
- 11日 熊本厚生年金会館文化サークル生見学。（40名）
「戦国肥後国衆まつり」見学者が多数見学に訪れる。
- 3月2日 RKKニュースキャッチャー・熊本日日新聞取材。
- 9日 石井・大三輪・田邊先生視察。
現地説明会。（40名）
- 10日 発掘調査10周年記念シンポジウム「検証：田中城跡」開催。
（約100名参加）
- 18日 佐賀県千代田町文化財保護審議員視察。（6名）
- 26日 埋め戻し完了。



第1図 全体図



第2図 遺構配置図



005

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 調査の概要

調査区は、城の西側斜面にあり、以前から地元で「弾正屋敷跡」と言い伝えられている面積978m²の平場である。

調査区の周囲には排土場になるような場所がないため、調査区を南北の二区に分け、片方を排土場にして調査を行うこととし、まず、北側（Ⅰ区）を発掘し、南側（Ⅱ区）を排土場とした。

例年通り約20cmの表土があったが、表土中からは土師器・磁器類などの小片が割りと多く出土し、生活の臭いを感じさせた。しかし、遺構自体はあまり多くなく、掘立柱建物跡が1棟と溝が数本確認されただけである。掘立柱建物跡は9.52×4.17mと過去に確認できた建物跡としては二番目の大きさで、溝は中央部を走るものは幅約0.8～1.3m、深さ40cmであるが他の溝は幅25～40cmと小さいが、深さは部分的に60cmを越えている。

Ⅰ区の調査が済むと、すぐに埋め戻しを行い、今度はⅠ区を排土場としてⅡ区の調査にかかった。

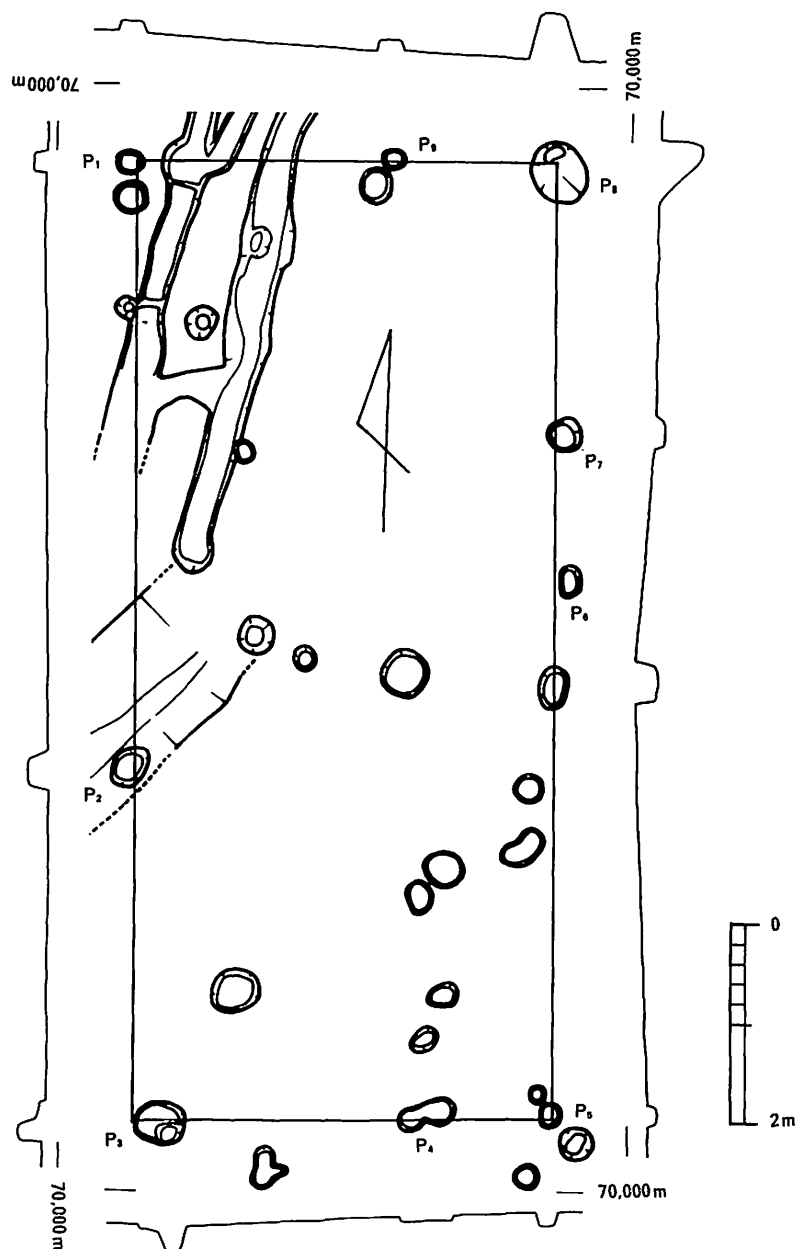
当初はⅠ区同様、細い溝が数本確認されただけだったが、表土剥ぎが進むにつれ、東側半分から今までに確認したことのないような大きな柱穴（径約50cm）が確認され、つながりを検討することにより、当初は2×2柱間の総柱建物跡を想定した。柱穴の大きさだけでなく柱間も3.20～4.00mと非常に長く、今までにない大きな建物跡ではないかと期待が高まった。さらに精査を続けていくと、北東隅の柱穴は確認できなかったが、北側に1×2柱間の下屋的なものが付く建物跡ではないかと思われるようになった。しかし、3月9日に開催した現地説明会の折り、専門調査委員の大三輪先生から建物跡にこだわらず、溝とのセットで他のものを考えてみてもいいのではないかと指摘を受けた。さらに、この建物跡の北側に、切り合う状態で土壌が確認された。これを掘り進むと、一面から二段に積まれた石積みを確認された。中央部には凝灰岩の塊が落ち込んでおり、状態を観察すると自然石を用いているのは、この一画だけであり、井戸跡ではないかと推定された。また中央部を南北に走る溝も確認された。Ⅰ区とⅡ区の境界部から二股に分かれ、東側の溝はⅠ区中央部を走る溝につながり、西側の溝はⅠ区の北西隅で確認された溝につながる事が確認され、この平場を三分割するように掘られていることが分かった。

表土剥ぎを行っているとき西側の遊歩道直下から土師器が確認され、掘り進むにつれ次々とその数を増していった。出土状態を観察してみると、完形に近い大きな破片を含みながら、小片が折り重なるように出土し、溝中に破棄されたような状態であった。

第2節 遺構と遺物

(1) 遺 構

掘立柱建物跡・溝・井戸跡などの遺構が確認された。Ⅱ区で確認された掘立柱建物跡と



第3図 掘立柱建物跡実測図

想定した遺構については、桁行と梁行の開きが大きいと専門調査委員の大三輪先生から建物跡にこだわらず、南北方向に延びる柱列と並行している溝（SD-02・03・04）とセットで考えてみてもいいのではないかと指摘があったため、今回はその方向で報告をすることとした。

① 掘立柱建物跡（第3図）

I区の西隅で、II区との境にあたる場所で確認された桁行3柱間（9.52m）×梁行2柱間（4.17m）の建物跡で、主軸をN2°Wに取る。柱間寸法は、桁行P₁～P₂～P₃は、P₁～P₂の補助柱が不明で6.00・3.52mであり、P₅～P₆～P₇～P₈は4.30・2.50・2.72mである。梁行P₃～P₄～P₅は、2.90・1.27mであり、P₈～P₉～P₁は、2.57・1.60mである。柱穴はほぼ直線的に並び、大きさはP₈が最大（63×52cm）、P₉が最小（24×19cm）である。深さはP₈が最深（44.4cm）、P₄が最浅（4.8cm）で、平均18.5cmである。

② 溝

・1号溝（SD-01・01'・01''）

今回の調査区で確認された遺構では最も古いと思われる遺構で、II区の中央部を南から北方向に走り、I区との境から東・西方向に分かれており、調査区を三分割するように作られている。幅0.8～1.3m、深さ15.3～46.9cmで、断面は逆蒲鉾型をしており、01→01'、また、01→01''方向に傾斜している。

・2号溝（SD-02）

II区のほぼ中央部を南西～北東方向に走る溝で、確認した長さは約12.2m、幅30～39cm、深さ3.11～6.9cmであり、SD-01''を切っている。

・3号溝（SD-03）

2号溝の約3.8m東側を、並行するように走っている。確認できた長さは6.55m、幅約40cm、深さ10.4～16.9cmである。

・4号溝（SD-04）

3号溝の約2.2m東側を、2・3号溝とほぼ並行するように走っている。SD-06に切られているため、約6mの長さしか確認できなかった。幅35～50cm、深さ13.6～21.7cmである。

・5号溝（SD-05）

II区の中央部をほぼ南北方向に走る溝で、I区との境まで長さ約17mを確認した。幅約40cm、深さ32.5～46.0cmで、壁面は底からほぼ直角に立ち上がる。井戸跡を切っている。

・6号溝（SD-06）

5号溝の約5m東側を、並行するように走っている。II区との境まで約15mが確認された。幅25～45cm、深さ30.8～40.8cmで、5号溝同様、壁面は底からほぼ直角に立ち上がっ

ている。

③ 井戸跡

直径約3mの土坑であったが、四分割して掘り進むと南西部分から二段に積まれた石積みを確認された。中央部には凝灰岩の塊が多数落ち込んでおり、遺物もいろいろ混入していたが、調査終了間際に雨が降り続き、水がなかなか引かなかったので実測が遅くなってしまい、次回に掲載することとした。

④ 柱 列

直径約50cmの柱穴が確認され、その並びを観察すると南西―北東方向に並んでいるものが4列認められた。ここでは西側のものから柱列1・2・3・4として紹介する。

柱列1は5個の柱穴からなり、柱間寸法は南から4.05・3.00・2.85・2.05mである。柱穴の大きさは、P₁₀が最小(28×30cm)、P₁₂が最大(47×55cm)で、深さはP₁₂が最深(37.7cm)、P₁₄が最浅(7cm)であり、平均の大きさは37.2×41.2cmで、深さは22.1cmである。

柱列2は3個の柱穴で、柱間寸法は南から7.55・7.40mである。それぞれ離れすぎているので、SD-05および井戸跡と切り合って、わからなくなっているのかもしれない。柱穴の大きさは、ほぼ同じ(平均45.3×52.3cm)であるが、深さは16.8～61.0cmとバラバラである。

柱列3は4個の柱穴からなり、柱間寸法は南から4.10・3.95・4.00mである。柱穴の大きさはほぼ同じで、平均51.8×53.8cm、深さは16.9cmである。

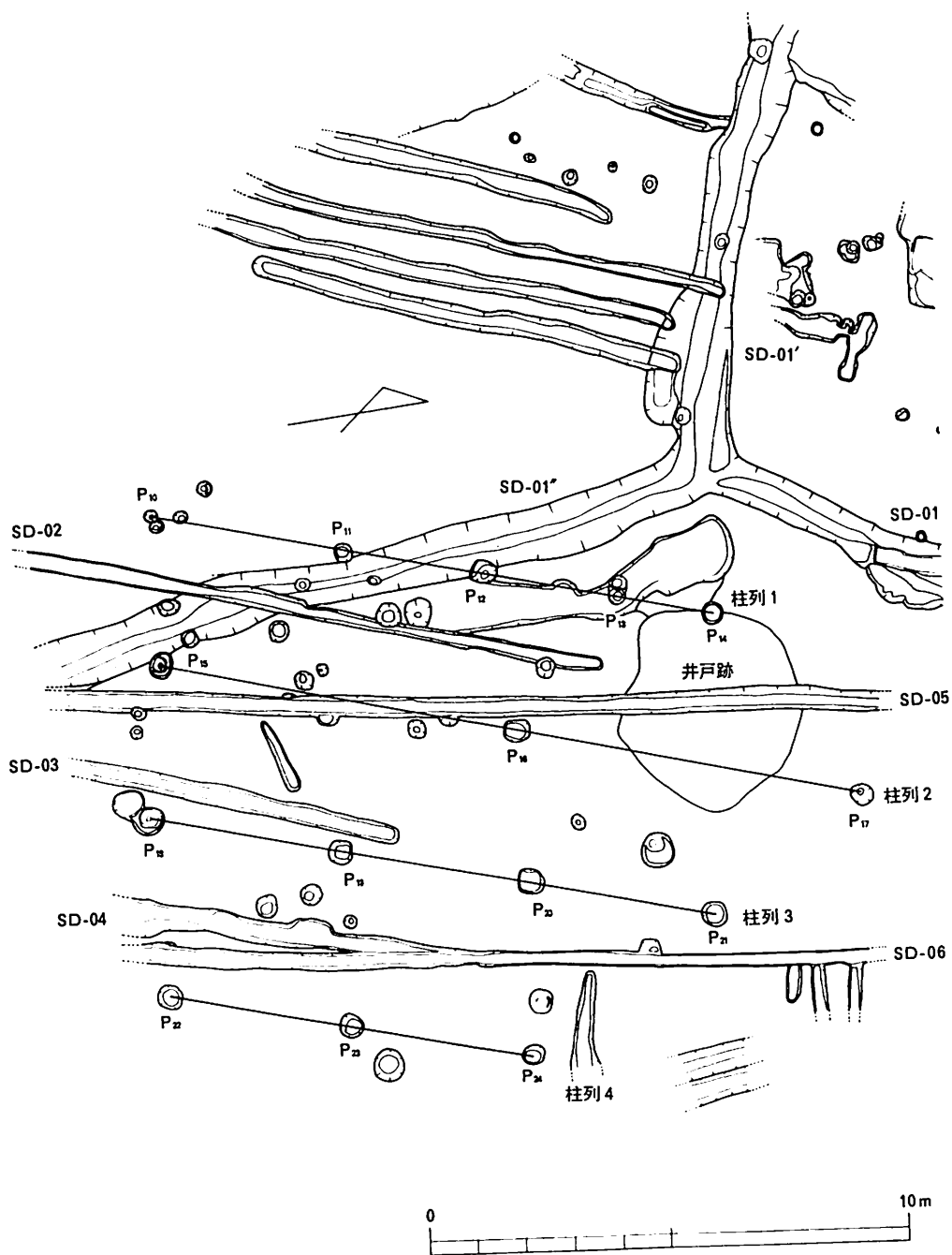
柱列4も柱穴の大きさはほぼ同じで、平均49.0×51.0cm、深さ18.0cmである。3個の柱穴からなる

(2) 遺 物

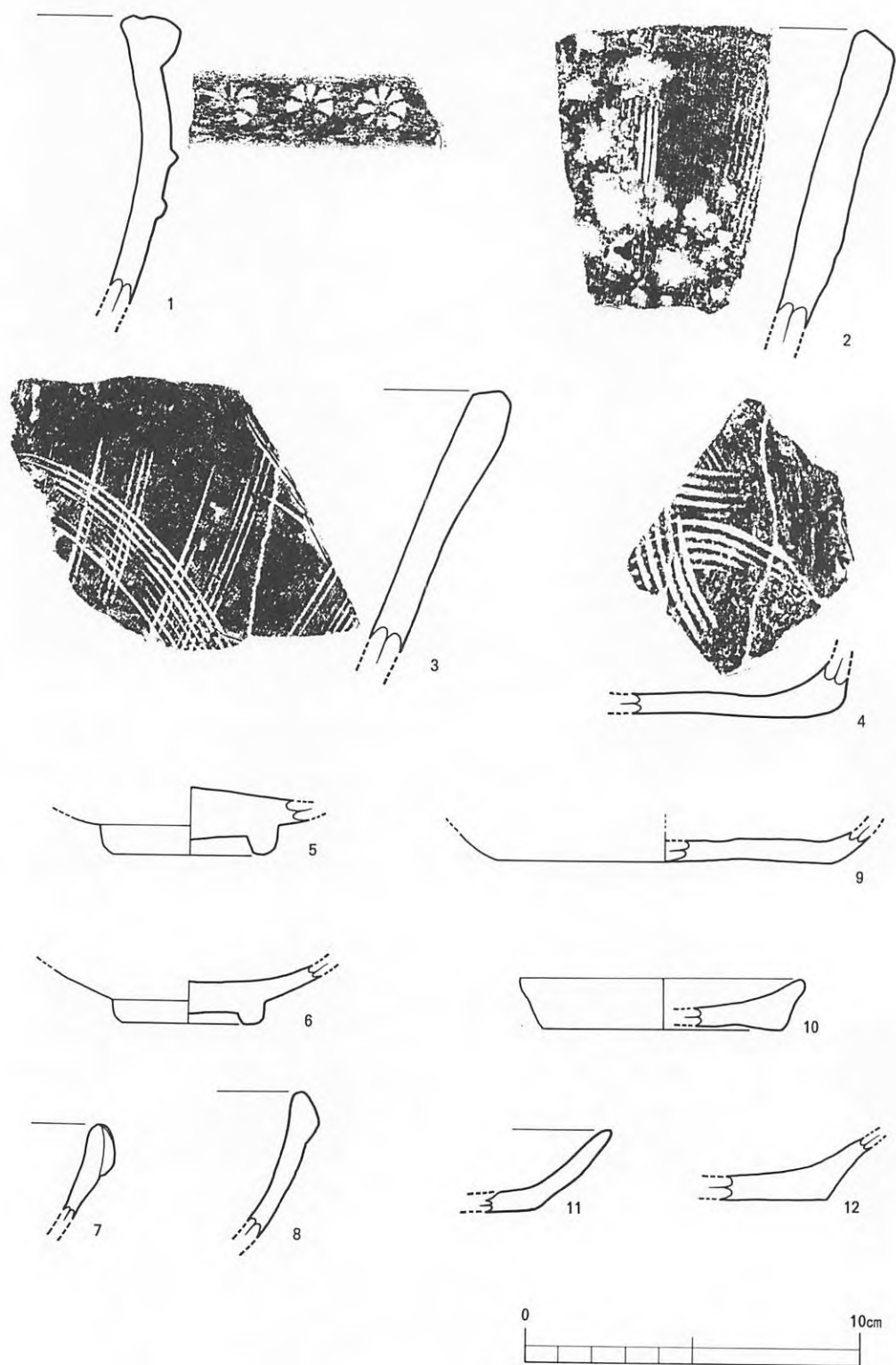
I・II区とも青磁・白磁・染付・土師器などの小破片および石臼などの石製品が出土したが、図化できるようなものは少なかった。ただ、西側遊歩道の近くから、多量の土師器が確認されたが、調査終了間近であったため今回の報告までに整理が間に合わず、次回にまとめることにした。

1は、瓦質の火舎の口縁部から胴部にかけての破片で、胴部は丸味を帯びている。口唇部には浅い凹線が、また、胴部には断面が三角形と蒲鉾型の突帯が一条ずつ巡らされており、口唇部と突帯の間には、花文のスタンプがある。

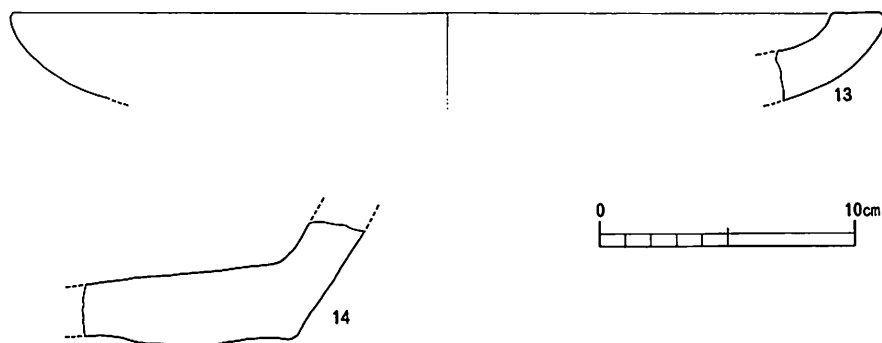
2はすり鉢で、内面に6～7本単位の条線が残っているが、よく使われているためか、下部の方はすり減っている。色調は、外面は淡灰色～淡褐色、内面は、淡褐色～淡コゲ茶色で両面とも凹凸が激しい。



第4図 II区遺構配置図



第5図 出土遺物実測図(1)



第6図 出土遺物実測図(2)

3は瓦質のすり鉢の口縁から胴部にかけてで、内・外面とも灰色で、内面には8本単位の条線がみられる。胎土・焼成は、非常に良好であるが、外面の表面は凸凹している。

4は、瓦質のすり鉢の底部である。内・外面とも灰白色で、内面には5本単位の条線が残る。胎土・焼成とも良好。

5・6は青磁の高台部分である。5は、両面とも青緑色の釉がやや厚めにかかっているが、畳付き部にかかった分は削り取っている。高台の直径は5.0cm。6は、両面とも淡青白色の釉が薄くかかっている。畳付き部にも釉がかかっているが、部分的には削り取られている。高台の直径は4.5cm。

7は、青磁の口縁部である。内・外面とも淡緑白色の釉が薄くかかっているが、口唇部には釉溜りがみられ、外面に厚く垂れている。また、口縁部は一度整形したあと、もう一度貼り付け、厚くしている。胎土・焼成とも良好で、全面に貫入がみられる。

8は、白磁の口縁部である。内・外面とも、ややにごった白色の釉が薄くかかっている。胎土・焼成とも良好であるが、外面に細かな砂粒がはずれたようなブツブツがみられる。

9～12は、土師器の皿である。9は、外面は暗褐色、内面はにごった肌色で、底部より内弯気味に立ち上がり、底外面と体部の境ははっきりしている。復元底径は10cmで、はっきりはしないが、糸切り底と思われる。10は、底部からやや内弯気味に立ち上がり、底外面と体部の境ははっきりしない。内・外面とも淡い肌色で、復元口径8.4cm、復元底径7.2cm、器高1.5cm。11は、内・外面とも肌色～黒褐色で、底部からやや内弯気味に立ち上がり、底部と体部との境ははっきりしている。12は、底部からやや外傾気味に立ち上がり、底部と体部の境ははっきりしている。内面はややにごった褐色、外面は赤味がかった褐色で、糸切り底と思われる。

13は、推定口径34cmの石臼である。内・外面とも非常に丁寧に研かれている。

14は、石鍋と思われる破片で、内・外面は大まかな整形を施されているが、底部は荒削りのままであり、まだ、未製品と思われる。

第Ⅲ章 ま と め

田中城跡の調査が始まって10年目を迎えた。毎年細々とだが調査を続けてきて、この10年間で約8,000㎡の調査を終了した。総面積は約80,000㎡もあるため、全体からみると、まだようやく1／10を終えたばかりに過ぎないが、この10年間の調査でいろいろな遺構・遺物が確認されることにより、新たな「田中城像」が浮びつつあるように思われる。

今年度は、以前から地元で「弾正屋敷跡」と言い伝えられている箇所の調査を行った。城全体における調査区の位置をみると、ほぼ南西隅に当たるが、この城が西向きに作られていると思われる城であることを考慮すると、この場所に「館」を構えてもいいのではなかろうかと思い、建物遺構が確認できるのではなかろうかとの期待のもと、調査を開始した。

調査の方は、周囲に調査区と同レベルの平場がないため、二分割して片方を調査し、残りを排土場とする方法を取らざるを得なかった。その結果、Ⅰ・Ⅱ区とも多くの溝や柱穴などが確認された。柱穴の並び具合を検討することにより、当初はⅠ・Ⅱ区とも各1棟の掘立柱建物跡を想定した。Ⅰ区で確認した建物跡は、9.52×4.17mとこれまでの調査で確認された建物跡の中で二番目の大きさとなる。また、Ⅱ区では約50cmと大きな柱穴が多数確認されたため、大型の建物跡を想定した。しかし、3月10日に開催した『発掘調査10周年記念シンポジウム』に先立って、9日に行った現地検討会の際、専門調査委員の大三輪先生から、「桁行と梁行の開き具合が大きすぎるので、建物跡にこだわらず、同方向に走る溝（SD-02・03・04）との関連で考えてもいいのではないか」との指摘を受けた。検討した結果、これほど大きな柱穴は主郭からも確認されていないため、何等かの建物遺構として考えたいが、逆にいえば、これほどの大きな柱を用いた建物ならば、もう少し規格性があってもいいのではないかと結論に達し、今後の課題とすることで今回は建物遺構からは外すこととした。しかし、井戸跡が確認されたことにより、このあたりが生活の拠点のひとつであったことは、間違いないものと思われる。

溝についても、掘られている方向からみてSD-01→02・03・04→05・06の順に作られており、少なくとも三時期があったことがわかった。特に05・06は「布掘り」の可能性も考えられ、また新しい発見となりそうである。

遺物は、例年同様、青磁・白磁・染付・土師器などの小片が出土し、調査終了間近には多量の土師器が確認された。来年度はこれらの詳細も含め、これまで10年間の成果をまとめる予定である。

版 图



(1) 調査前状況
(遠景・北より)



(2) I区調査前状況
(近景・北東より)



③ II区調査前状況
(近景・南東より)



(1) I 区遺構確認状況（北より）



(2) I 区遺構発掘状況（北より）



(3) 掘立柱建物跡（東より）



(1) II区遺構確認状況（北東より）



(2) II区遺構発掘状況（北東より）



(3) 1号溝（SD-01）発掘状況



(4) 井戸跡の石積み確認状況（北東より）



(1) 火合出土状況 (遺物番号 1)



(2) 青磁出土状況 (遺物番号 6)



(3) 青磁出土状況 (遺物番号 7)



(4) 土師器出土状況

報 告 書 抄 録

ふ り が な		たなかじょうあと						
書 名		田中城跡 X						
副 書 名		伝・弾正屋敷跡調査の概要						
巻 次								
シ リ ー ズ 名		三加和町文化財調査報告						
シリーズ番号		第 1 0 集						
編 著 者 名		黒田裕司						
編 集 機 関		三加和町教育委員会						
所 在 地		〒861-09 熊本県玉名郡三加和町大字板楠 7 6 TEL 0968-34-3111 内線55						
発 行 年 月 日		西暦 1 9 9 6 年 3 月 2 9 日						
ふりがな 所収遺跡	ふ り が な 所 在 地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	。 。 。	。 。 。			
たなかじょうあと 田中城跡	くまもとけんたまなぐん 熊本県玉名郡 みかわまちおおあざ 三加和町大字 わにあざふるしろ 和仁字古城	43366		33度 4分 31秒	130度 35分 53秒	19950801 ～ 19960329	978	整備に伴う範囲および遺構の事前確認
所収遺跡名	種 別	主な時代		主 な 遺 構		主 な 遺 物	特 記 事 項	
田中城跡	城 館	戦国時代 末期		掘立柱建物跡・ 溝・井戸跡・ 柱穴		青磁・白磁・染付・火舎・すり鉢・土師器など	以前から地元で弾正屋敷跡といわれていた箇所の調査。 井戸跡などが確認されたことにより、生活の拠点のひとつだったことが推測される。	

三加和町文化財調査報告書 第10集

田 中 城 跡 X

1996年3月29日

発 行 三 加 和 町 教 育 委 員 会
〒861-09

熊本県玉名郡三加和町板楠76

印 刷 熊 本 県 印 刷 セ ン タ ー
〒862 熊本市鹿埴瀬町496-1